

鳥取県総合情報誌

vol.141

とっとり Now

Spring 2024

巻頭
特集

儚く豊かな抒情的世界

〴〵旅する画家、小早川秋聲の生涯



開運おかげ詣で
因幡と伯耆の神社

櫻谷神社（鳥取市）

2

巻頭
特集

儚く豊かな抒情的世界

旅する画家、小早川秋聲の生涯

TOTTORI
おもしろ発見手帖

流しびなとひな人形

18

ここにこの人

サウンドクリエイター 井谷 優太

19

企業紹介

MASUYAMA-MFG株式会社

22

鳥取のうま味

名物「さばしゃぶ」と地物料理

23

きらり匠人
継承の技が語る世界

刀剣研師 森井 惲訓

24

Voice・読者プレゼント・編集後記

26

□「あーとの森」「特集」「カメラアイ」「VIVA! トットリLIFE」は休みます。



巻頭特集：小早川秋聲の作品



●表紙イラスト●

池平 徹兵
いけひら・てっぺい

1978年福岡県生まれ。鳥根大学卒。
東京オペラシティアートギャラリーprojectN、
岡本太郎現代芸術賞展、VOCA展などに出演。

141号表題『このぼりとサーフバード』
東日本大震災で亡くなった天国の子どもたち
へ贈る「青い鯉のぼりプロジェクト」。活動が
全国に広がるなか、2016年から鳥取市内の
袋川でも実施。掲げられた青鯉は、宮城県東
松島市へと送られる。この絵の制作直前に能
登半島地震が起きた。この表紙絵の制作に
復旧復興への祈りを込めた。

キャンバス/油彩

『とっとりNOW』が毎月届く
「ふるさと来LOVEとっとり」
会員を募集中！

入会
年会費
無料



境内に立つ瀬織津姫命像



開運
おかげ
詣で

因幡と伯耆の神社

知る人ぞ知る「禊ぎの神」

櫻谷神社 鳥取市

「神社」とは「神の社（＝屋代）」であり、元々は神様を迎えるための仮の建物や祭壇のこと。そこに祀られる神様を「祭神」と呼ぶ。神社めぐりは、神々に出会う旅でもある。祀られている神様の多くは、日本神話に登場する。伊勢神宮の天照大御神や出雲大社の大国主大神など、一度は耳にしたことがあるはず。しかし、櫻谷神社の祭神「瀬織津姫命」は、『古事記』や『日本書紀』にも姿を現さない「ミステリアスな女神」だ。一方、あらゆる神事の前に唱える「祓詞」や「大祓詞」には登場しているため、実は熱心なファンもい

て、県外からの参拝者も珍しくない。「佐久那太理に落ち多岐つ速川の瀬に坐す瀬織津比売と伝ふ神大海原に持出でなむ」（『大祓詞』より）。訳すると「流れの早い溪谷にいる瀬織津姫という神様が、すべての罪を海に流す」。禊ぎや厄払い、運氣アップが期待できるという。ほとんどの神社が年々祭りを簡略化するなか、御禊祭・例祭・夏祭・秋祭・新嘗祭と5つの祭が健在。省かれることが多い本殿にお供物を運ぶ儀式も継続されており、氏子らの厚い崇敬が感じられる。

文・写真／角田 治



地元の氏子たちが毎日のように参拝する拝殿



年5回の祭では、氏子たちがひとりずつ本殿にお供物を運ぶ。写真は新嘗祭（2023年12月）



厄払い
祓い浄め
治水

ご利益



つのだ・おさむ グラフィックデザイナー。神仏探訪家。『山陰の神々 古社を訪ねて』（山陰の神々刊行会）など、神社にまつわる書籍の取材・執筆・撮影。

神社情報

社号：櫻谷神社 鳥取市桜谷299
☎ 0857-22-5025（宇倍神社）



秋聲画室にて『私の写真輯』：個人蔵

夢く豊かな 抒情的世界

“旅する画家” 小早川秋聲の生涯

鳥取県日野町にある寺の後継ぎに生まれながら、
 日本画家として大正、昭和初期に活躍した小早川秋聲。
 1995年、戦争画《國之楯》の発見をきっかけに再評価の
 波が起こり、ようやくその全容が見えてきた。
 実は、激動の時代に世界中を巡り歩いた
 “旅する画家”であり、心を打つ抒情豊かな作品も多い。
 彼の生涯と画業をたどる。

文／鳥飼明子



《春寒賜浴》1960年



《惺惺》1930年

おやつよりも半紙求めた幼少期



《山中鹿介三日月を拝する之図》1902年頃：日野町

共に光徳寺へと帰郷する。「画家になりたい」という強い思いは増すばかりだった。

そして1901年、京都の歴史画家・谷口香嶠に師事し、その画塾「自邇会」に入って画家への一歩を踏み出した。『平家物語』に登場する那須与一が、船上で揺れる扇の的を射抜く名場面を表した作品《譽之的》は、胄や武具などが緻密に描かれており、歴史風俗に造詣が深く、正確な考証のもとに作画する師の教えを忠実に守っている。

20歳で騎兵連隊に入隊すると、「馬のことをよく理解するように」と上官に命じられ、世話をしながら馬の表情や毛並み、骨格などを観察した。この経験から秋聲は馬好きで知られ、乗馬の技術もかなり高かったようだ。後年、渡米してヨセミテ国立公園を雪中観光した際、吹雪のため下馬してそろそろと下山する他の観光客を尻目に、巧みな馬術で下山したという痛快なエピソードが残っている。

志を胸に、歴史画家に弟子入り



秋聲家族写真 左から秋聲、和子（長女）、隆（次男）、緑（妻）=1933年：日南町美術館

小早川秋聲（本名・盈麿）は1885年9月、鳥取県日野町黒坂にある光徳寺の住職・小早川鐵僊の長男として生まれる。父・鐵僊は、75年から京都の東本願寺で經理の仕事を担当し、会計顧問にまでなった傑僧。そして母・こうは、摂津三田藩第13代藩主・九鬼隆義子爵（※1）の養妹。秋聲は母の実家である神戸市の九鬼家で誕生し、そこで9年間を過ごす。

若様扱いで育った秋聲は、幼少期から絵を好んだ。おやつよりも絵を描くための半紙と筆を欲しがるほどだったという。9歳になると東本願寺の衆徒として僧籍に入り、中学卒業まで僧院で修行する。その間も、学校へ通うより、博物館などで熱心に絵を鑑賞し、模写を繰り返していた。1900年、秋聲は東本願寺の勤めを終えた父と



《譽之的》明治末期～大正期：個人蔵



京都・下鴨森ヶ前町にあった秋聲の自邸（左から2人目が秋聲）=日南町美術館

作品《懺陣》（4頁）は、兵士と共に戦火をくぐり抜けてきた軍馬を、村人が花で飾り労をねぎらったという漢詩に着想を得たもの。白い毛並みだけでなく、まつげやひげの一本一本まで細かく描かれており、馬に対する愛情が伝わってくる。

小早川秋聲年譜

1885年（0歳）	9月26日、鳥取県日野町の光徳寺住職・小早川鐵僊と兵庫県三田市の藩主・九鬼隆義の養妹・こうの長男として誕生。
1894年（9歳）	東本願寺の衆徒として僧籍に入る。
1901年（16歳）	京都の歴史画家・谷口香嶠に師事。
1905年（20歳）	一年志願兵として騎兵連隊に入隊し、日露戦争に見習士官として従軍。
1909年（24歳）	京都市立絵画専門学校（現：京都市立芸術大学）の本科生として谷口香嶠に推挙されるも、東洋画を学ぶため中国へ渡る。
1913年（28歳）	再び中国へ。清朝宮廷秘蔵の美術品を見学、紫禁城武英殿に毎日通い東洋美術を研究。各地の名勝古跡を巡る。
1915年（30歳）	11月9日、谷口香嶠が死去。
1916年（31歳）	11月9日、山元春舉に師事。「早苗会」へ入会。
1918年（33歳）	5月、丹波、丹後、但馬を旅して、13年ぶりに山陰へ帰郷。山陰日日新聞社（米子市）などを訪問後、出雲大社を参拝し、松江から隠岐へ渡る。
1920年（35歳）	12月、神戸港から中国を経て渡欧。約2年半にわたり、インド、イタリア、オーストリア、ハンガリー、スイス、フランス、イギリス、グリーンランド、オランダ、エジプトなど17カ国を外遊。各地の美術館や博物館、寺院などを見学。
1921年（36歳）	中国で病み、ひと夏を大連で過ごす。その後、上海から乗船し、インド、セイロン島を経てエジプト・ポートサイドへ向かう。
1922年（37歳）	9月、大連で料理屋「千勝館」を経営する多田仙之助の三女・緑と結婚。翌10月、産まれて間もない長男・一を亡くす。
1923年（38歳）	9月21日、母・こうが死去。
1925年（40歳）	9月17日、長女・和子が生まれる。
1926年（41歳）	3月17日～7月14日、神戸港から渡米。サンフランシスコ、カリフォルニア、カンザス州、イリノイ州を経て、シカゴ、フィラデルフィア、ニューヨークなど各地を回る。
1928年（43歳）	1月4日、次男・隆が生まれる。
1930年（45歳）	帝国美術院展覧会の推薦（永久無鑑査）となる。
1931年（46歳）	9月18日、柳条湖事件、満州事变勃発。12月、満州事变後の戦跡を視察。
1933年（48歳）	7月、山元春舉が死去。
1937年（52歳）	7月7日、盧溝橋事件、日中戦争勃発。8月、盧溝橋事件の軍事画を陸軍省から囑託され、日中戦争勃発直後の北支戦線へ画家としていち早く赴く。以後、度々従軍画家として派遣される。
1938年（53歳）	6月、陸軍省後援のもとに設立された大日本陸軍従軍画家協会の理事となる。会長に横山大観。
1941年（56歳）	12月8日、太平洋戦争が勃発。
1943年（58歳）	6月、大東亜戦争記録画制作のため陸軍よりビルマに派遣される。
1944年（59歳）	2月、《國之楯》を制作。
1945年（60歳）	8月15日、第二次世界大戦終戦。
1968年（82歳）	5月、《國之楯》を一部改作。
1974年（88歳）	2月6日、老衰のため京都市内の病院で死去。東本願寺に埋葬される。

※文中の国名は当時

24歳の秋聲は、香嶠の推挙を受け、京都市立絵画専門学校（現：京都市立芸術大学）に入学する。しかし、「水墨画を学ぶには中国へ行く方が本筋」と考えた秋聲は、学校を辞めて北京へ。一年半にわたり東洋美術の研究に没頭した。これを皮切りに、秋聲は生涯に45回、中国大陸を訪れている。

1915年11月に香嶠が亡くなり、1年の服喪が明けた後、近代京都画壇を代表する日本画家・山元春舉に師事、画塾「早苗会」に入会する。写生を重視する円山四条派の伝統を受け継いでいることから、早苗会では写生旅行などを盛んに行っていた。

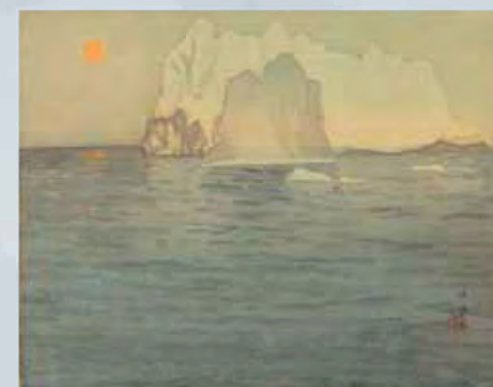
た。さらには山岳会も発足、秋聲も比叡山、白馬山、日本アルプス一帯などの登山に参加している。

18、20年にかけては山陰、南紀、北海道を旅しており、土地ならではの風景や民俗を描いた画文集を刊行する。絵画だけではなく、旅の紀行文や自作作品の所感など、さまざまな文章を新聞や美術雑誌などに寄稿する随筆家でもあった秋聲。膨大な数の文章を書いており、20年近くにわたり秋聲を研究する松竹京子さんによれば、随筆をはじめ、側面資料が載っている美術冊子の収集は、7千冊を超えるという。

国内外へ出かけ 精力的に紀行



《伊太利ベスビオス山 夕月 流浪楽人》
1923～24年頃：個人蔵



《グリーンランドの氷山の月》1923～24年頃：個人蔵



《米国 グランドキャニオン 暁月》昭和初期：個人蔵



《エジプトカイロ 夕月》1923～24年頃：個人蔵



《語られぬなやみ》1921年：日南町美術館

インドやヨーロッパの美術にも触れたと思うようになった秋聲は、35歳の時に念願のヨーロッパへ、約2年半をかけて約17カ国を外遊した。中国で古美術研究をした後、上海からマレー半島、インドネシア、インド、セイロン島、エジプトを経てフランスへ。そしてパリを拠点に、ドイツ、チェコスロバキア、オーストリア、ハンガリー、スイス、イタリア、イギリス、ギリシャ、ギリランランド、オランダなどヨーロッパ各地を巡った。（※国名は当時）



《巴里所見》1925年：個人蔵

の旅は以前から軽装孤独を楽しみつづ、只の一人切りで旅をつづける。而して所謂紳士的気取りの旅行はしない、又イヤである』

思うままに、自由に旅することを好み、現地の言葉でコミュニケーションを取る。高級ホテルに泊まることもあるが、それよりはむしろ裏町や労働者たちの中に入って一緒に食事をし、会話することを楽しんだという。いくら旅慣れているとはいえ、人並み外れた度胸と行動力だ。

気ままに自由に一人旅満喫



《長崎へ航く》1931年



《寂 支那客中所見》昭和初期：日南町美術館

月光が照らす情景の趣好む

ヨーロッパの旅で出合った数々の情景も、美しい絵で残されている。特徴的なのは、多くが月景色であること（8頁）。紀行文に『月は快く我影を照らしてくれる。ナポリで淡月を見たときより一層好い心地がする』とあり、月光に照らされた風景の趣を好んでいたようだ。

改めて見ると確かに、秋聲の作品には月が描かれているものが他にもたくさんある。月光の下だからこそ浮かび上がる儚い陰影と淡い色彩は、見る者の想像を膨らませ、心にとりと染み込む情趣があり、秋聲作品の魅力の一つといえるだろう。

いたのか。人一倍探究心が強く、自分の目と心で実体験したものを描こうという心持ちがあつたに違いない。後年の随筆に『産れながらにして漂泊児同様』『私自身を深めたい信念のもとに』と記されているように、深い孤独の中で人生探求の旅を続けていたのかもしれない。



《氷雨降る宵》大正後期：鳥取県立博物館

心の安らぎを得た地、山陰

国境超える評価と平和への祈り

日南町美術館主任学芸員 浅田裕子

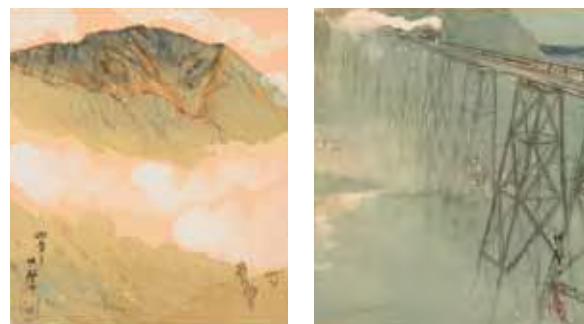


初代米子市長・西尾常彦氏と共に
撮影された秋聲(1935年、米子市役所前)
＝写真提供：米子市立山陰歴史館

小早川秋聲が日野町黒坂で生活したのは、中学卒業後のわずか1年余りだ。東京で出版された雑誌『風俗画報』に、黒坂での風俗や行事のことを寄稿している。また、1917年の美術雑誌『東京美術』には、「秋聲氏の技工は輕妙にして凡ならず小品の作品にも生氣滂瀾として将来恐るべき大家なるは一般畫人の認むる處にして人格の高潔、パンの爲めに畫を描くと云ふが如き卑俗なる畫人にあらず(省略)」と紹介されている。

すでにその地歩を固めつつあった秋聲が再び山陰へ足を踏み入れたのは、1918年5月、33歳の時。その13年ぶりの帰郷を鳥取の人々が歓待したことは想像に難くなく、鳥取市や米子市で個展が開催されたほか、日野郡では有志により画会の計画が立ちあがっていた。この帰郷から2カ月後に、画文集『裏日本所見畫譜』(※)を出版したことから、秋聲の山陰への愛着は深まったと私はみている。

※裏日本所見畫譜＝山陰各所をめぐったそれぞれの風景を切り取り、紀行文とともに描かれた画文集



『裏日本所見畫譜』
《夏雲(大山)》《余部の橋(余部)》(左から)＝1918年：個人蔵

その後も、山陰への旅を繰り返し、大山からみた弓ヶ浜半島の美しい景色や山陰各所の風物についての随筆も、多く残している。ある時は、「早苗会」の人々を連れて浦富(岩美町)の漁村や日本海の波を写生するために訪れたり、従軍で病んだ傷を癒やすために山陰の山奥を好んで過ごしたりしていたことから、この山陰が、秋聲にとって心からの安らぎを得ることができる地であったことが伺える。

日本の戦後は80年を迎えようとしている。しかし、いまだ世界各地で止むことなく戦争が起きている。余談ではあるが、この執筆依頼を受けた時期と同じ頃、イギリスの教育書出版社Pearson Educationと、台湾の衛城出版から、秋聲の《國之楯》を掲載したいとの連絡を受けた。小早川秋聲が描き残した作品が、国境や人種を超えて戦争の歴史と世界平和への祈りを、語り続けているのだ。山陰が生んだ画家、小早川秋聲の評価は世界へと広がりを見せようとしている。



《未来》1926年：個人蔵



《玩具絵巻》1916年：鳥取県立博物館

1931年9月の満州事変を発端に日本が戦争の時代に突入すると、今度は従軍画家としての旅が始まる。かつて騎兵連隊に属し、日露戦争に従軍していた経験がある秋聲しかも、旅慣れていて語学も堪能とあれば、これほどの適任者は他にいなかっただろう。早速、同年12月、32年1月にかけて北満州を訪れ、零下40℃以下にもなる酷寒の中で活動する兵士や現地の様子をスケッチする。以来約11年、計8回にわたり、北満州を中心に、中国、モンゴル、ビルマなどで従軍を果たす。（※国名は当時）

戦争画は、兵士や民衆の戦意高揚が目的であり、日本国および日本軍のプロパガンダの手段であった。ゆえに、前線で勇猛果敢に戦う軍や兵士の様子を写實的に表した作品が多いが、秋聲の絵は少し異なる。軍旗を背に、直立不動で夜営を守る歩哨兵、疲れ果てて眠り込む兵士、彼ら pensando 祈る家族など、独特の視点で描かれており、寂かながらも強く訴えかけてくるものがある。

自ら戦地へ赴き、独特の視点で表現



《虫の音》1938年：鳥取県立博物館



《国旗は輝く》1941年：個人蔵

厭戦かと返却された戦争画

《國之楯》も、痛いほどの思いが感じられる作品だ。これを制作中に見た兵士らは、「圧倒された様子で帽子をとり、画面に向かって深々と頭を下げ、将校たちも一斉に背筋を伸ばし、敬礼した」という。また、搬出の手伝いに来た女性も、絵を見てその場に泣き伏した。

天覧に供するため陸軍省の依頼で描かれたようだが、なぜか受け取りを拒否されている。完成は44年2月、

戦況が徐々に厳しくなっている時期であり、英霊を悼み敬う表現が、逆に厭戦（※2）につながるかねないと捉えられたのかもしれない。

実はこの作品、完成当初は将校の体の上に桜の花が降り積もるように描かれていたという。所蔵する京都霊山護国神社から寄託されている、日南町美術館主任学芸員の浅田裕子さんは、「2000年の展覧会前に作品の撮影をしていたら、黒い背景に何か付いているのに気づいて。よく見たら、黒く塗りつぶされた桜の花だったんです」と、当時を振り返る。

裏板を外したところ、「昭和四十四年五月一部改作」の記があった。同年8月に刊行された『太平洋戦争名画集 続』（ノーベル書房）に収録するための改作だったのだろう。秋聲はそれを一区切りとし、作品は再び長い眠りについた。

※2 厭戦＝戦争を嫌がること。



《國之楯》1944年、1968年改作：京都霊山護国神社



塗りつぶされた桜の部分



《天下和順》1956年：鳥取県立博物館

天下和順願い、穏やかに日常描く

終戦を迎えた秋聲は、過酷な従軍生活で心身を病んでいた。戦犯として捕まることを覚悟し、自ら命を絶とうとする危うさもあり、家族が家中の刃物を隠すほどだったという。大規模な展覧会への出品制作はほとんどしなくなり、仏画や仙人図、静物や干支を描いた小品など、穏やかで温かみのある絵を描いて過ごしていたようだ。

満月の下で酒をのみ、朗らかに踊り続ける人々を描いた《天下和順》

は、秋聲の平和への思いが込められている。「天下和順」とは、浄土真宗の経典「無量寿経」の中に出てくる、天下泰平を願い唱える偈文（※3）の一つで、東本願寺の僧籍を持つ秋聲が好み、大切にしていた言葉だ。秋聲の長女・和子さんの名もここから取っているという。広い野原の奥まで踊りの列が続く様子は、「この平和がいつまでも長く続きますように」という、秋聲の祈りのように思えてくる。

そこに紙があれば描いてしまう、秋聲はまさに「描くために生まれてきた人」だったといえよう。最後の絵は、亡くなる6時間前に和子さんが届けたチョコレートケーキのスケッチ。翌日に食べるつもりだったようで、「あ・し・た」と書かれていたという。88歳の生涯であった。再び秋聲に注目が集まったのは、それから21年後の1995年、京都霊山護国神社に奉納され、ひっそりと飾られていた《國之楯》が『芸術新潮』の記者の目にとまり、戦後50年記念大特集で取り上げられたこと



《聖火は走る》1964年

最期まで “絵描き” 画業を未来へ



《山を出でます聖》1946年：個人蔵

からだ。50年たっても、秋聲の絵が放つ魂の叫びは見る者に大きな衝撃を与えた。そして2021、22年にかけて、全国巡回展「小早川秋聲 旅する画家の鎮魂歌」（京都・東京・鳥取）が開催されるまでとなったのだ。

画家の枠に収まらない彼の活躍は幅広く、さらに作品の掘り起こしや側面の研究が進み、新たな秋聲像が浮かび上がってくることを期待したい。

秋聲の素顔

「『家に3日といたことはない。ずっと旅ばかり』、秋聲さんの長女、山内和子先生（染織家）はそう話していました」。前述の秋聲研究家・松竹さんは、秋聲の家族から普段の様子を聴き取った数少ない人物だ。

もともと30年余り武者小路実篤を研究していた松竹さんは、知人の紹介で和子さんと知り合い、毎週のように話を聴くようになった。その中で、実篤が漢詩に造詣の深い秋聲に教えを請い、複数回交流していたこと、2人が同じ年であることがわかり、「文学者・実篤と同じ時代を生きた日本画家・秋聲と、秋聲の眼

家族だけが知る 槍に誓った覚悟

から見た日本を研究したくなった」という。

画家、随筆家、古武道の達人と、さまざまな顔を持つ秋聲だが、和子さんが女学生の頃、学校の先生が俳句雑誌を見せて「君のお父様は俳人としても有名なんだよ」と言われ、驚いたそう。また早苗会の新年会では、余興として歌舞伎を披露した秋聲に、京都画壇の大家・竹内栖鳳が「君は役者になったら良かったね」と褒めたとか。秋聲の多才さが分かるインサイドストーリーだ。

京都市内の自宅には、画室が3つあった。しかし他者が入ることを許さず、絵を描く姿を家族にも見せなかった秋聲。ところが孫の山内久治さんは、招かれて何度か入ったことがあるという。30畳はあろうかという広い空間に絵の具や画材が整然と並び、その片隅に四つ切りくらいの紙が置いてあった。

「祖父はその前に立て膝で少し前かがみ気味に座ると『えいつ』と一声。どこから筆を入れたかわからない見事な円。そばにいた私は鳥肌が立つほどでした」と回想している。

久治さんにはもう一つ、印象的な思い出がある。1階に長い槍が置いてあり、興味を抱いて祖父のところへ持っていくと、「こんなものを持ってくるな」と一喝された。しかし続けて、「なぜこれがあると思う？私は戦争で人の生死をたくさん目の当たりにしてきた。だからこそ、絵を描くときは自分の命を懸けて描く。その気持ちを忘れぬよう置いている。だから、元どおりに」と諭されたそう。

「そういう人なんです」と松竹さん。秋聲の絵がなぜこれほど胸を打つのかわかった気がした。

※3 偈文＝経典中で詩句の形式をとり、仏徳の賛嘆や教理を述べたもの

井谷 優太

サウンドクリエイター
Itani Yuta



幻想的で奥行きのある楽曲が高く評価され、国内外で活躍する倉吉市在住のサウンドクリエイター・井谷優太さん。生まれつき脳性まひを患い、体を自由に動かせないが、持ち前の明るさとパワフルさを武器に好きなことを突き詰め、人生を切り開いている。

文／倉恒 弘美 写真／田中 良子

息災を人形に託す ～流しびなとひな人形～



事務局長の田中さん

桃の節句が女兒の成長を願う行事となったのは江戸時代。ひな人形は、平安時代に厄払いの呪具として生まれ、川や海に流すものだった。その名残で伝わる流しびな行事やひな人形の歴史を「もちがせ流しびなの館」(鳥取市用瀬町)の事務局長・田中倫明さんに聞いた。

稲わらで編んだ棧俵に赤い着物姿の紙びな、あられ、ひしもち、桃の小枝を添えて川に流す



伝統行事「用瀬の流しびな」

棧俵編み続け、脈々と継承

江戸時代中期ごろ、鳥取城下から流しびな行事が伝わり、行商人が紙製のひなを載せた棧俵を売り歩いたことで、千代川流域に伝わった。棧俵は1年間神棚に据え、旧暦の3月3日、家内の汚れや災いを託して川に流す。時代とともに廃れつつあったが、用瀬町では「ときわ流しびなの会」が棧俵を作り続けており、行事を支えている。

ひな人形の変遷

時代により顔立ちに変化

人形から派生した紙や布で作られた平面の立ちなから始まり、江戸時代中期の1716年以降には、大型で豪華な装束をまとった座びな「享保雛」、1764年以降は現代の型の原型となる「古今雛」が親しまれた。顔立ちも時代により変化している。



ルーツは平安・室町時代の祓人形

平安・室町時代に幼児を災いから守る祓人形として登場。やがて「天児」を男、「這子」を女に見立ててひな段に飾った。貴族から生まれた風習だという。



享保雛
京都で生まれ、面長の能面風、切れ長の目

古今雛
江戸(東京)で生まれ、柔らかな表情

ひな人形の作り方

作業は分業、熟練の技光る

ひな人形を作るには、多くの工程があり、頭、手足、髪付、小道具などそれぞれの職人がパーツを作り、最終的に着付師がそれらを組み合わせ完成する。一体ずつが熟練の技の集結だ。



頭の制作＝桐の粉末とにかわ(※)を混ぜて作った生地を型に入れ、形づくる
※にかわ：動物の骨髄などから採れるゼラチン



仕上げ＝わらを束ねた胴体に手足、衣装をつけてから、頭腕を差し込む

問 もちがせ流しびなの館
所 鳥取市用瀬町別府32-1
WEB <http://nagashibinanoyakata.jp> ☎ 0858-87-3222

文・イラスト / 渡部紘巳(わたなべ・ひろみ) 納豆が大好きなイラストレーター。1982年生まれ、鳥取県育ち。づるづるした食べ物が好きなことから、屋号は「スタジオづるり」。WEB=<http://dururi.com>

表現で世界を広げる

パソコンのモニターに向き合い、マウスやシンセサイザーの鍵盤を器用に扱う井谷優太さん。DTM（デスクトップミュージック）と呼ばれる、パソコンソフトを使って音楽を制作・デザインする手法で、楽曲を次々と生み出す。モニター上に五線譜は見当たらない。ソフトに自身で設定したさまざまな種類の音を組み合わせ、メロディーをつくり出す。何層にも複雑に音色を重ねたり、残響を編集したりすることで、包まれるような音の奥行きや立体感が生まれるという。

現在、井谷さんは、実家近くの県営住宅（倉吉市）に一人で暮らす。その日常は、音楽制作をしたり、インターネットを通じて仲間と楽曲を動画配信したり、イベントやライブ出演があれば、車いすに乗って東京や海外にも飛んでいる。

このほか、障がいの有無を超えて作品をつくる劇団「じゆう劇場」（鳥取市鹿野町）では、俳優としても舞台に立ち、全身で自身を表す。とにかくハンディキャップをものともせず、エネルギーに動く日々だ。

好きなことを見つけたら、一直線に突き進む。当時、住んでいた実家近くの福祉作業所に通っていたが、「毎日、家と作業所の往復だけではつまらない。世界を広げたい」と、両親を説得して一人暮らしを決断。その後、東京で音楽活動する人たちと交流し、「さらに刺激を受けたい」と、毎週のように東京へ往復しながら活動した時期もあり、実にバイタリティーにあふれる行動力に驚く。現在は、拠点を倉吉での1カ所と定め、制作やライブ活動に励んでいる。

果敢に突き進む行動力

音楽制作を始めたのは、成人してからだ。きっかけは趣味のテレビゲームだった。高校卒業から数年たった頃、ゲームを通じて当時流行していた音声合成技術「VOCALOID™」に興味を湧き、自分に合う音楽ソフトを見つけて試しに作曲してみた。「ゲーム感覚で操作できるので、初めてでも思った以上にできた。この手法な

独自の楽曲づくりで国内外に発信

プロフィール

1985年、倉吉市生まれ。脳性まひの障がいがあるが、独自の方法で音楽制作やライブ活動を行う。2015年、「第12回ゴールドコンサート」でグランプリを受賞。16年、東京藝術大学学長（現在）の日比野克彦さんが監修するアートプロジェクト「TURN」にアーティストとして参加。17年、平昌パラリンピック100日前記念イベントへの招へい、21年、東京パラリンピック開会式に出演。23年、「ゴールドコンサートグランドチャンピオンシップ」で準グランプリ受賞。同年、国際福祉機器展H.C.R.2023ファッションショーで総合音楽プロデュースを担当。

【WEB】 <https://www.yutaitani.com/>



総合音楽プロデュースを手掛けた「車いすファッションショー」(2022年、フランス) ★出典：日本障がい者ファッション協会 WEBサイト

「好き」を追求し、人生切り開く

国内外に広がる活動

転機が訪れたのは、2015年。憲人さんの勧めで、障がいの国際舞台芸術コンクール「ゴールドコンサート」第12回大会に初出場し、見事グランプリに輝く。これをきっかけに音楽活動を本格化させると、県内外から出演や制作依頼が舞い込むように。

2021年には、東京パラリンピック開会式でパフォーマーとして出演し、話題をさらう。快進撃は続き、22年はフランス・パリで開かれた「車いすファッションショー」で、総合音楽プロデュースを担当。井谷さんの世界観あふれる5曲がランウェイを彩った。さらに翌23年、「ゴールドコンサート」の過去10年のグランプリ受賞者が出場するチャンピオンシップで、準グランプリ受賞を果たし、その勢いは止まらない。

これまでに作曲した数は、すでに200曲をくだらない。子どもの頃から慣れ親しんだ映画音楽やゲーム音楽がインスピレーションの源



「じゆう劇場」で俳優としても活躍（写真右）、さまざまな作品に出演している

★写真提供：井谷優太



他のアーティストともコラボし、県外でのライブ活動なども精力的に展開する井谷さん
★写真提供：井谷優太



「ゴールドコンサート」のグランドチャンピオンシップで準グランプリを受賞した際の演奏（2023年）
★著作・写真提供：NPO法人日本バリアフリー協会



出場した「ゴールドコンサート」でグランプリを受賞（2015年）。これを機に音楽活動が本格化する
★著作・写真提供：NPO法人日本バリアフリー協会

だ。今後は「福祉とは関係のない音楽イベントに進んで出演したいし、映画やゲームの音楽制作にも挑戦してみたい」と語る井谷さん。音楽を通じて多くの人と出会い、大きく広がった世界。「音楽は、僕のコミュニケーションツール」と、食欲に次の新しい曲を生み出していく。

鳥取発、宇宙行き——。

総勢4人の小さな金属加工会社が作った部品が今、地球を飛び出し、宇宙空間で重要な役割を果たしている。

MASUYAMA-MFG株式会社(鳥取市)は、

いくどとなく訪れたピンチを乗り越え、

その高い技術力と結束力で挑戦を続ける。



超難削材「インコネル」を使ったオブジェ

小さな会社、宇宙へ羽ばたく

代表の益山明子さんは、両親が始めた金型製造の会社で事務を担当していたが、2009年に父が亡くなり、跡を継ぐ決心をした。しかし製造や経営の経験はなく、図面も読めない。奮起して小学生向けの図形の本から学び直し、膨大な努力を重ね、機械を動かせるまでになる。

その後、取引先の開拓などに奮闘したが、大きなピンチが続く。生き残るために自動車関連部品の製造に絞ると、2018年に起こった米中貿易摩擦で注文が激減。続くコロナ禍で、売り上げは7割も減った。

会社存続の危機に直面した益山さん。悩んで不眠が続く、「どうせ眠れないなら星でも見よう」と鳥



「信頼できる社員に感謝しています」と話す益山さん(左から2人目)と社員のみなさん

取砂丘へ。砂に寝転んで星空を眺めてみたら「そうだ、あそこに行くものをつくろう」とひらめく。

単にロマンを感じただけではない。宇宙関連の技術は国防にも関わるため、海外に流出しない。これから伸びる業界だと踏んだのだ。未知の分野ながら「失うものは何もない」と捨て身で臨んだ。

まずは技術を磨くため「超難削材」に挑戦。宇宙・航空分野で使われるニッケル合金素材「インコネル718」は、高温や腐食に非常に強い反面、精密加工が極めて難しく、扱える会社が国内には少なかった。社を挙げて研究し、鳥取県産業技術センターや岡山県内の工具メーカーと力を合わせ、半年ほどで加工可能になる。



さまざまな素材を加工できることがわかるイメージボード(写真上)
写真下はアルミ材を削り出して作ったピアス



MASUYAMA-MFG 株式会社

代表 / 益山 明子
設立 / 1983年
資本金 / 700万円
〒鳥取市南栄町43
☎ 0857-53-2622
🌐 <https://masuyama-mfg.co.jp/>

とはいえ、その技術を何社にも売り込んだが門前払いが続く。ようやく会えた宇宙ベンチャー企業の代表に提案したところ好反応を得て、開発中の月面探査車の構成部品を担当することに。

さらに宇宙航空研究開発機構(JAXA)が宇宙で使う部品を作るまでになった。「ここまで来られたのは優秀な社員たちのおかげ」と益山さん。

23年夏、鳥取県は鳥取砂丘を月面に見立てた実験施設「ルナテラス」を開設、宇宙産業を後押しする。益山さんは「より多くの企業が参加して、ここが宇宙パーツ製造のコアになれば」と夢を語る。今後も「大手と対等に」「誇りが持てる仕事」を目指し、社員一丸となって形にしていく。

文 / 松村亜紀子 写真 / 佐野明美

■名物「さばしゃぶ」と地物料理■

品書きを見た途端に心が躍る。【ノドグロ、白イカ、もさえび、岩牡蠣、松葉蟹……】境港をはじめ、県内の漁港で水揚げされた新鮮な魚介がずらりと並ぶ。さらに豊かな鳥取の大地で育まれた良質な牛、豚、鶏肉を使ったひと皿も魅力的だ。米子駅前に2店を構える「美酒佳肴 ゆらく」は、2019年に開業。代表の高井賢一さんと料理長が2人で立ち上げた。その料理は和食をベースにしつつ、フレンチやスパニッシュ、イタリアンのエッセンスも取り入れるなど自由自在。地域の食材が持つポテンシャルを見事に引き出す。

ここで今注目を浴びているのが「さばしゃぶ」だ。境港で水揚げされた鮮度が

高い天然サバを、サバ節でとったコクのあつた出汁にくぐらせる。出汁には、スライスされたタマネギがたっぷり泳ぎ、その甘みが絡むことで極上の味わいに。

さらにワサビを添えた自家製ポン酢につければ、まろやかな酸味と爽やかな香り、辛味が加わってうま味がアップ。山陰の蔵元から吟味した日本酒や、県産フルーツなどのリキュールとの相性も抜群だ。

現在「さばしゃぶ」は、近隣の7店舗で提供。出汁やタレが各店で違い、食べ比べも面白い。米子市の新たな名物として頭角をあらわしている。

文 / 日高 むつみ 写真 / 佐野 明美



鳥取の
うま味

新鮮で旬な
地元の味、存分に

さばしゃぶは1人前1738円(税込)【写真は2人前、注文は2人前から】。奥は「愉楽コース」(11品、8800円(税込)のうち、前菜盛り合わせとメイン(「フグ白子のタルト」と「鳥取和牛の炙り焼き」)。コースの内容は季節で変わる。

美酒佳肴 ゆらく hanare

☎ 米子市明治町262
☎ 0859-21-2606
🕒 16時30分～24時
(23時30分L.O.)
📅 日曜日・祝日
(月曜日が祝日の場合は営業)



「持ち味」を最大限に引き出すべく、
刀と真剣に向き合う森井さん



鋭い切先に優美な反り、美しい地肌の模様
や刃文……。類まれな美しさから「鉄による
最高の芸術品」と評され、国際的にも注
目を浴びる日本刀。歴史ある名刀から現代
刀まで、それぞれの刀がもつ特徴（時代、
流派、作者など）を見極め、研ぐことでそ
れを引き出すのが研師、森井 偲訓さんだ。

刀剣研師 森井 偲訓

研師の道へのきっかけは19歳の時。叔
父が収集していた刀を手にとった時、凛と
した美しさや光彩の鮮やかさに心を奪わ
れ、研師の門をたたく。内弟子として修業
後に独立、以来58年、現在に至る。

「研ぎの技術自体は、年数をかけて繰り
返すことで習得できる。しかし技術の限界
を超えるには、刀を見て作り手や伝えてき
た人々、刀が生きてきた歴史に思いをはせ
ることが必要です」

何百年を生きぬいてきた唯一無二の偉大な
存在だけに、自然と尊崇の念が湧くという。

「いかに減らさず、研ぐ前より美しく、
しかも研ぎの技が刀の前に出ぬよう、恣意
をなさないことが大事。結果として、『い
い刀だなあ』と見てもらえるよう丁寧に研
ぎ上げる」

座右の銘は、修業中に目にした世阿弥の
言葉「動十分心、動七分身」。心を十分に
働かせイメージを描くけれど、体を動かす
のは七分に留め、やりすぎない。その三分
の余白こそが留めとなり、見る人を幽玄の
世界へ誘う。

文／日高 むつみ 写真／田中 良子

尊崇の念で「美」を引き出す



森井さんが手掛けた刀
銘「出羽大掾藤原国路」
★写真提供：鳥取県立博物館



1振研ぎ上げるために、
緻密な作業の積み重ねが
時にひと月ほども続く

MEMO

研師とは、砥石などを用
いて刀を研ぎ、地鉄や刃
文の美しさを際立たせる
職人。一方で、日本刀の
目利きであると同時に、
芸術家としての力を併せ
持つ。仕事は全て手作業
で刀の作り手の特長を大
事に、粒子の異なる砥石
をいくつも使い分けて研
き上げる。

砥石は「天然」「人造」で粒子が
違い、作業工程によって使い分ける



巻頭特集「おいしさ生み出す小さな立役者」。記事を読んでパン、日本酒、ワイン、ウイスキーなど、色々な商品は、発酵微生物の働きが必要なものと教えていただきました。

(大阪府河内長野市 角田 泰弘)

今号で一番心をつかまれたのが、巻頭特集の扉に描かれていたsarapoさんのイラスト。切り取って飾りましたよ！鳥取には素敵なアーティストさんがたくさんいらっしゃいますね。今後も楽しみにしています。

(宮崎県国富町 首藤 真由子)

特集の「田んぼを守る若き〴〵戦士、たち」が良かったです。今後、さらに深刻になりそうな地方の後継者不足による耕作放棄地や、技術継承問題の解決につながるきっかけになるのでは。素晴らしい活動だと思いました。

(鳥取県米子市 樋口 香)

「鳴り石の浜」で以前、テントサウナの企画に参加し、爽快な体験でした。「この人」の岩田さんの記事を読み、自分はゴミを見ても横目で見ただけで拾おうとしなかったことを、とても反省しました。

(広島県広島市 備本 梨加)

「カメラアイ」の「曙色のユートピアと樹氷」が素晴らしかった。冬の大山に感動しました。

(神奈川県横浜市 上山 順子)

友人が鳥取の出身で、鳥取の魅力をいつも聞かせてもらい、NOWを読んでいます。仕事を辞めたら、1カ月くらいは滞在してみたいと夢を抱き、計画中です。

(鹿児島県霧島市 堂領 香代子)

毎回、届くのを楽しみにしています。地元の知らなかったスポットや、そこで活躍されている方々に焦点を向けられていて、とてもすてきです。NOWの存在をもっと多くの人に知ってもらい、見ていただきたいですね。

(鳥取県鳥取市 田口 朋子)

■ 応募方法

下記の項目を記入し、ハガキ、電子メールまたはWEBの専用応募フォームでご応募ください。

- ① 希望の商品記号または商品名
- ② 掲載記事への意見・感想
- ③ 応募用クイズの答え
- ④ 住所・氏名・年齢・電話番号

※②の感想が次号の「voice」に掲載される場合、住所・氏名が明記されることをご了承ください。また商品の当選は、発送をもって発表に代えさせていただきます。

※お預かりした個人情報は、プレゼント発送以外の目的に使用することはありません。



● 応募用クイズ ●

Q ひな人形のルーツは祓人形。その後、ひな段に飾ようになった際の男人形の名前は？空いている□に当てはまる文字を記入してください。

□ □ □ つ

140号のクイズの答えは「鳴り石の浜」

■ 応募先

〒680-8570 鳥取市東町1丁目220
鳥取県広報連絡協議会(鳥取県庁内)
「とっとりNOW読者プレゼント」係
メールアドレス: now@kouhouren.jp

応募バッチ

2024.
3/31
消印有効

A



絵本『ふつうのいるか』

(発行:現代学舎 文・絵:池平徹兵) 【3名】

イルカが「知らない世界」を見たいと冒険の旅へ。道中で馬、象、鳥、モグラなどとのさまざまな出会いを通じ、成長していく物語。世代を問わず「勇気」をもらえる一冊だ。

問 池平徹兵

WEB <https://teppeiikehila.hatenadiary.com/>

有機乾燥きくらげ (10g) 【5名】

鳥取県産の乾燥きくらげ。食物繊維やビタミンDが豊富なうえ、肉厚で食べ応えがある。サラダやスープ、炒めもの、デザートなどレシビの幅が広い優秀食材だ。有機JAS認証も取得。

問 一般財団法人日本きのこセンター菌茸研究所

☎ 0857-51-8111

B



かにみそバーニャカウダ

(130g) 【3名】

境港産のベニズワイガニのカニみそと、国産ニンニクを使ったバーニャカウダ。カニみそのエグ味を抑えたまろやかな味わいと香りが食欲をそそる。パスタソースなどのアレンジも美味。

問 株式会社門永水産

☎ 0859-44-3011

C



Editor's note

□ ■ 編集後記 ■ □

え？これが同一人物の絵？……歩みを進めるにつれ、脳内で「？」が躍る。多種多様な作品群を前に、〴〵思い込みのバール。が1枚ずつはがされ、違う色に彩られていく。2022年冬、小早川秋聲(P4)の展覧会だ。従軍画家の役割はおぼろげに理解するも、その一面しか知らなかった。見終わる頃には、昭和風に言うところの〴〵首ったけ。だ。□作風だけではない。無愛想かと思いきや、

実はユーモアセンス抜群で寛容、関わる人々を虜にする、所謂「人たらし」なのだ。ああ一度でいい、相まみえてみたかった。□魅力を掘り起こし〴〵覚醒。させたのが浅田さん、松竹さんたち。この長年の功績なしに、再評価はなかっただろう。感謝に堪えない。□心地良い余韻は今も続く。知ればきっとあなたも恋をするに違いない！と、確信を持って企画した特集だ。人は「予想外」にぐらっとくる生きもの。裏切られる驚きと感動、潤いのひとときをぜひ。【Hi】

〈企画・編集・発行〉鳥取県広報連絡協議会
〒680-8570 鳥取市東町1丁目220(鳥取県庁内)

〈制作〉株式会社シセイ堂デザイン
〒680-0841 鳥取市吉方温泉3-802 TEL.0857-22-1122



0857-26-7086



0857-29-6621

『とっとりNOW』はWEBでも見られます。
また、WEB限定のコラム「すべての道は鳥取に通ず」「菌活で広がるきのこの世界」「満ぶく よくばりグルメ皿」も連載中。

